

看護業務の効率化

試行支援(コンサルテーション)事業

社会医療法人 柏葉会

柏葉脳神経外科病院

選択した取組(2019年度受賞)

ナースハッピープロジェクト(NHP)

音声入力による記録時間の削減

〈今年度試行を実施するための支援を希望〉

支援施設 聖マリアンナ医科大学病院

試行期間 2020/9/1～2021/1/31

プレゼン動画視聴はこちら ▶



柏葉だからできる信頼と尊敬の医療



社会医療法人
柏葉会 柏葉脳神経外科病院



所在地 北海道札幌市

従業員数 321名 うち看護職員数：116名(2020年12月1日現在)

病床数 144床 (高度急性期38床、急性期32床、地域包括ケア18床、SCU12床、回復期44床)

入院基本料 急性期一般入院基本料1

現状と課題

- 時間外勤務の主な原因は、業務の中で一番後回しになる看護記録と考えられた。
- 音声入力システムを2020年1月に導入したが、トライアル段階であり、看護師の使用率が上がっていない状況だった。理由として、多忙時に新しい取組を開始することへの抵抗感、音声入力のやり方がよく分からない、音声入力への恥ずかしさ等があった。
- 当院では、今後職員1人に対し1台のスマートフォン導入を予定していることから、スマートフォンを活用した音声入力システムの運用を普及したい意向があった。
- 音声入力を有効活用し、記録時間短縮とそれに伴う時間外勤務削減に取り組みたいと考えた。

目標

■ 看護記録による時間外勤務の削減

2021年1月までに勤務時間内の看護記録時間を20分増やし、
時間外勤務を20分削減する

目標設定について

業務量調査を行った結果、亜急性期病棟の勤務時間外看護記録の時間が16.2分だったため、目標を4か月間で20分削減に設定した。

具体的な試行計画

2020年 1月	音声入力システム導入	● 全病棟で音声入力を開始し、パソコンでの音声入力、スマートフォンでの音声入力ができる環境を整えた。 (各病棟にスマートフォン1台、デスクトップパソコン上の音声入力システムを1~2台導入した)
2月	改善活動開始	● 支援施設の音声入力の成功事例を病棟に周知し、改善に取り組む。
9月	モデル病棟への説明	● モデル病棟に音声入力の方法等を説明する。
10月	音声入力対象者を決定	● 音声入力対象者を決定（スマートフォン使用や看護研究に興味があり、業務量調査に協力可能な者）。業務量調査のため、スマートフォン未使用対照群を選定(音声入力対象者と同じ病棟、同じ人数)。人選は病棟の担当者に一任。
	スマートフォンの購入 第1回業務量調査の実施	
10月～ 2021年 1月	使用状況の確認	● スマートフォンを7台追加購入し、計11台での運用を開始。
1月	第2回業務量調査の実施	● 毎月、病棟のスマートフォン使用者に使用状況を確認。
		● 支援施設の音声入力の成功事例を見て、改善に取り組む。

■ 前回(2020年1月)導入時～取組前の状況

音声入力システム：スマートフォン型を各病棟 1 台、
デスクトップ型を各病棟 1～2 台設置

● スマートフォン型

⇒各病棟の代表者が主に使用し、直近1～2か月程度は病棟内2～3人のスタッフにも使用してもらうように代表者から使用方法を広めている状況である。

● デスクトップ型

⇒設置当初は、数名のスタッフが興味を持ち使用していた。

【良かった点】

特にタイピングが得意ではないと自覚しているスタッフが積極的に使用しており、「看護記録が早くなったと思う」「腱鞘炎が少し改善した」等の意見があった。

【課題】

使用しないスタッフの意見として、「他のスタッフが使用しているため、使用できない」「誰も使用していないため使用しにくい、パソコンに向かって話すことが恥ずかしい」「忙しいと音声入力システムをしようすること自体を忘れてしまう」「誤字が多く修正が手間である」等が多く聞かれた。

■ 音声入力システム導入にむけた準備

● 業務量調査による看護記録・時間外勤務の実態把握

以下を把握するための業務量調査の実施方法・項目について助言を受けた。

- ①看護記録に要している時間の把握（午前・午後それぞれにおける看護記録時間等）
- ②時間外勤務の実態（時間外勤務の要因とその時間）

支援施設の助言を受けて以下のように実施

- ・期間は2週間、10分単位の記述式の調査を、日勤・夜勤の両方で実施した。
 - ・時間外勤務内容の項目について、看護記録を含む時間外勤務の要因把握を目的とするため、看護記録に焦点化せず、17項目について実施した。
 - ・支援施設より、モデル病棟の全スタッフがスマートフォンを所持し一斉にスタートしてはどうかとの助言があったが、試行期間が短く、全スタッフが使用することは難しいと考えたため、音声入力に興味を持つ一部のスタッフから使用を開始した。
- ★業務量調査を、音声入力使用群・非使用群の2群間比較で実施することとした。

● 音声入力システム推進にむけた準備

- ・経営層の後押しもありスマートフォンを増台、音声入力の浸透を狙った。
- ・IT部門担当者の協力を得て、Wi-Fiアクセスポイントを増やした。



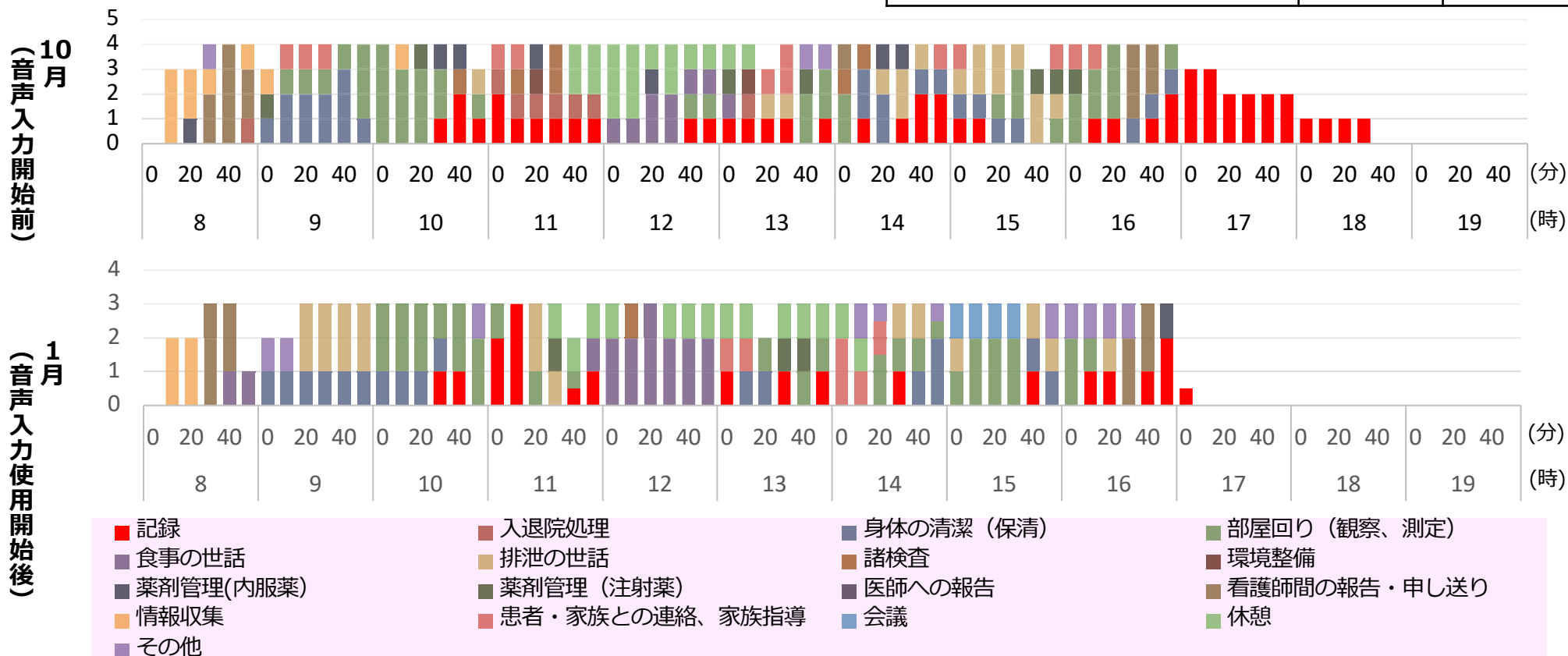
■ スタッフへの周知・普及

- 支援施設より助言を受けた具体的な使用場面と使用方法を、口頭での説明および支援施設で使用している映像を活用しながら病棟スタッフに伝達した。他の病院でうまくいった方法であることを合わせてスタッフに伝えることで、「やってみよう」という気持ちになったと考えられる。
⇒廊下等でケアの合間にスマートフォンに小声で話しかけたり、ベッドサイドで処置を行いながら音声入力を行う方法等について助言を受けた。
- 大勢の看護師に一齐にアナウンスしても他人事と捉えられることも多いと予想し、夜勤時にナースステーションで個々に声掛けをするなど、個別にデモンストレーションや使用方法の説明を行うと興味を持ってくれたため、使用を促す声掛けを繰り返し行った。
- 使用方法を説明しても「分からない」「難しい」という意見が多かったため、使用方法の説明書を作成した。
⇒アイコンや実際の使用画面に、操作内容と方法を記載した。

■ 音声入力システム導入による成果 ～最も音声入力を使用したスタッフの業務量調査結果～

- 10月時点で17時以降に実施していた看護記録（赤）がほとんど無くなった。
- 看護記録の平均時間が大幅に削減された。

1日あたりの所用時間	10月	1月
看護記録の平均時間	122.5分	63.3分
勤務時間外の看護記録平均時間	45分	1.7分



スタッフの反応

● 導入時

- ・ 中途採用の看護師は環境の変化に慣れているためか、使用に対する抵抗感が少なく感じた。
- ・ 記録業務やIT機器の取り扱いが苦手だからこそやってみたい、というスタッフもいた。
- ・ 音声入力そのものに対する恥ずかしさが壁になっているように感じた。

● 使用に慣れてきた段階

「慣れてくると音声入力のほうが断然に早く、楽」「誤字や脱字の修正が面倒だが慣れてきた」といった反応があった。

● 病院側からの反応

音声入力に限らず、新しいことをやりたがらない人が一定数いるのは事実。まずは試行錯誤しながらでも、音声入力に対する抵抗感を少しでもなくすることが大切。

Point!

周知・普及に関する支援施設からの助言内容

- ✓ 新しい取組がなかなか進まないのは当たり前のこと。嫌がられても諦めないで言い続けることが大切。
- ✓ 恥ずかしさに対しては、音声入力を使用するスタッフが増えて、使っていないほうが恥ずかしいという状況になると全体的に抵抗感がなくなる。
- ✓ ベテランや影響力のあるスタッフが積極的に使用することで、病棟全体に使用者が増えていく。

■ 目標に対する評価

- 看護記録に要する時間が削減された。
- 音声入力使用群の方が、記録に要する時間が短時間であった。

	音声入力使用	音声入力未使用
急性期病棟 記録時間平均 (勤務時間外看護記録平均)	87.5分 (15.0分)	108.3分 (63.3分)
亜急性期病棟 記録時間平均 (勤務時間外看護記録平均)	65.0分 (4.6分)	104.0分 (8.0分)

参考) 10月の業務量調査結果：

※回答数が少ないため、10月の業務量調査結果は、参考値として記載

- スマートフォン型音声入力システムの使用について、「慣れてくると楽」といった肯定的な意見が出るようになった。

- 将来的にスマートフォンの一人一台支給をめざすために、積極的に使用してもらうための取り組みを続ける。スタッフ全体への使用を推進するため、音声入力に対する「いいな」「羨ましい」「私もやってみたい」という雰囲気醸成し、全病棟への普及を目指したい。リハビリ科ではすでにスマートフォンを一人一台使用しているため、看護部でも推進したい。
- 4月入職の新人には音声入力を最初から活用してもらうなど、音声入力の使用が当たり前の環境をつくり、5年以内に音声入力の使用率が9割となることを目指したい。
- 音声入力を積極的に使用することによって、看護業務の効率化につながり、患者へのケア時間が増えるなどの好事例をつくる。
- Wi-Fi環境のさらなる整備により、音声入力システムを使用しやすい環境の調整を行う。